

# 心のケアへ 沖縄からも 寄り添う それが医師

精神科医・村上さんら

## 宮古で親身に活動 アフガン経験生かす

「必要とされるところに行く。それが医師の使命」。東日本大震災被災者の心のケアのため、沖縄県から駆け付け国立病院機構琉球病院(精神科)の村上優院長(61)のチームは宮古市で活動している。岩手の自然をこよなく愛し、アフガニスタン復興支援にも携わった村上院長は、心と心の「つながり」を取り戻すため被災者に寄り添う日々を送る。



こころのケアチームのスタッフとミーティングをする村上優院長(左から2人目)＝宮古市・宮古地区合同庁舎

チームは同病院と頼ら若手スタッフの計6本県の築池病院の合同人。宮古地区合同庁舎で、村上院長のほかを拠点に24日から活動し、精神保健福祉士している。

午前8時、車中でミーティング。スケジュールを確認すると、車に乗り込み避難所へ。

一人ぼつねんと座る人。近所同士など数人のグループ、その傍らで遊ぶ子どもたち。避難所に集り成されたさまざまな人間関係の中に若手スタッフがすーっと入り込んでいく。「沖縄から来たの！寒いでしょ？ 雪を見たのは初めて？」とスタッフに矢継ぎ早に質問を浴びせる子どもたち。子どもたちの笑顔に、周囲の大人の表情もほころんでいく。自らの思いを語りた

人の傍らで聞き入り、優しく受け止める。口を差し挟むことは少ない。安心して語れる相手がいることがいかに重要か、語り終えたその表情には静かな充足感が漂う。

チームは午後5時に合同庁舎に戻ると、市宮古保健所、県内外から応援にきた保健医療チームと2時間以上かけて会議。持参した履歴に書き込み、長い一日が終わる。

村上院長は、ベンチャワール会で中村哲医師と共にアフガン復興支援に携わった経歴を持つ。2005年に国立病院機構花巻病院に勤務した際は、岩手の豊

かな自然を感嘆した。翌年から沖縄へ。大震災に「尋常なことではない。なんとかせなにかんと、すぐさまこころのケアチームを組織。九州で手配したレンタカーに医療・事務用品、寝袋など一切の荷物を積み込み、陸路を24時間かけて本県入りした。

「テレビで見ているが！」。被災地には、未曾有の惨状が広がっていた。だからこそ、アフガンで難民医療などに携わった経験が生きる。市や県の保健師らと連携し、避難所巡回のほか、通院が困難

な精神疾患患者のケアに努める。地元保健師らの動きに「自分たちも被災者なのに、しっかり動いておられる。なかなかできることではない」と賛辞を贈る。アフガンの経験からしても、復興にはとても長い時間がかかるだろう。心のケアにも長期的視野で取り組む必要がある」と、まずは被災者が相談しやすい関係づくり、関係機関との細やかなネットワークづくりを進める。「被災者の方々は、どうか孤立しないでほしい。大震災で失ったものに多量に、頼りなつなかりも生み出せることだろう。そのため私たちも努力したい」。静かな語り口が心強く

このころのケアチームが県内で活動。県知事から全国知事会への派遣要請を受け、厚生労働省が調整した。宮古市では琉球病院・築池病院合同チームのほか静岡県立こころの医療センター、山田町で鳥取医療センターと大阪府大船町で神奈川県(4月2日まで)一関市・南光病院、釜石市で和歌山県、大船渡市で久里浜アルコール症センター、陸前高田市で東京都チームがそれぞれ活動している。